

いじめられ経験が精神的健康に与える影響

○中山義朗・安藤孟梓
(福山大学人間文化学部心理学科)

目的

いじめ被害は、抑うつ、不安、不機嫌、怒りといった精神的側面に影響を与える（岡安・高山, 2000）。しかし、高等学校におけるいじめられ経験が環境の変化が起こる大学生の精神的健康に関連するかは検討されていない。そこで、高等学校におけるいじめられ経験が大学生の精神的健康の悪化を予測するかを検討する。

方法

調査協力者：大学（短期大学・専門学校を含む）1年生 162 人（平均年齢 18.62 歳，SD = 0.49）。

調査時期：2023 年 10 月に実施した。

調査材料：①フェイスシート（パートナー・相談できる友人・相談できる家族の有無をそれぞれ回答してもらった）。

②Social Phobia Scale (SPS) 日本語版（金井・笹川, 2004）：他者からみられることに対する不安を 20 項目 5 件法で測定した。金井・笹川（2004）の社会恐怖患者の SPS 日本語版平均点の 32.30 をカットオフスコアと設定した。

③Patient Health Questionnaire (PHQ-9) 日本語版（村松, 2021）：うつ病性障害の症状レベルを 9 項目、4 件法で測定した。Muramatsu et al. (2018) の基準に基づいて、本研究ではカットオフスコアを 10 点以上と設定した。

④大学生用日常生活ストレス尺度短縮版（嶋, 1992）：日常生活で大学生が遭遇するであろうと思われるストレス 23 項目、5 件法で測定した。

実施手続き：Qualtrics を用いてクラウドソーシングサービス上で実施した。

分析方法：高等学校におけるいじめられ経験の有無を説明変数、PHQ-9 のカットオフスコアと SPS のカットオフスコアをそれぞれ目的変数としたロジスティック回帰分析を行った。統制変数として調査材料①の項目、調査材料④を使用した。データ分析には HAD（清水, 2016）を用いた。

倫理的配慮：福山大学人間文化学部心理学科の定める倫理指針を遵守して行った。

結果

対象の内訳はいじめられ経験あり群は 14 人、いじめられ経験なし群は 148 人であった。ロジスティック回帰分析の結果、いじめられ経験は SPS（オッズ比：1.61, 95%信頼区間：0.30—8.59）、PHQ-9（オッズ比：0.39, 95%信頼区間：0.07—2.22）を予測していなかった（Table1, 2）。

Table1

従属変数をSPSとしたロジスティクス回帰分析

変数名	オッズ比	95%下限	95%上限
いじめの有無	1.61	0.30	8.59
大学生ストレス尺度	1.10 **	1.06	1.14
恋人の有無	0.71	0.25	1.99
友人の有無	0.65	0.19	2.19
家族の有無	0.40	0.11	1.43

Table2

従属変数をPHQ-9としたロジスティクス回帰分析

変数名	オッズ比	95%下限	95%上限
いじめの有無	0.39	0.07	2.22
大学生ストレス尺度	1.08 **	1.05	1.12
恋人の有無	0.62	0.18	2.15
友人の有無	0.41	0.14	1.22
家族の有無	0.49	0.15	1.65

** $p < .01$

考察

事前の予測とは異なった理由として2つ考えられる。1つ目は、質問項目のいじめの内容的妥当性が低かった可能性がある。先行研究（岡安・高山, 2000）では、経験率の高いいじめ様態を項目として採用していた。本研究では回答時に文部科学省（2013）のいじめの定義を提示し、回答者に判断してもらったため、いじめの程度が低く、いじめの影響が小さい人も経験ありと答えた可能性がある。2つ目は、時期の問題が挙げられる。先行研究では、中学生を対象に中学校で経験したいじめについて質問しているが、本研究では過去のいじめについて質問している。大学等への進学により環境の変化が起こり、現在進行系のいじめも無くなったため、精神的健康に対する影響が見られなかったと考えられる。今後、いじめの影響を弱める要因を検討していく必要がある。